地震のインパクト認知がリスク追求傾向に及ぼす非線形的な影響の 研究:2015年兵庫県県民防災意識調査の結果報告

A Study of Nonlinear Seismic Impact-Perception Effects on Risk Taking : Report of 2015 Hyogo Prefecture Survey on Preparedness

> 〇川見文紀¹,立木茂雄² Fuminori KAWAMI¹ and Shigeo TATSUKI²

1同志社大学社会学部社会学科

Department of Sociology, Doshisha University

2 同志社大学社会学部

Department of Sociology, Doshisha University

The purpose of this paper is invastigating the factors which enable people to avoid risk without Risk-taking bias under uncertain loss that prospect theory suppose in the field of disaster prevention. In this analysis, Hyogo Prefecture Survey on Preparedness (N=1103, Response rate:39.4%) conducted by Disaster Reduction and Human Renovation Institution is used. As a result, it became clear that those who have high-disaster management literacy tend to choose avoiding risk as the physical and human impact perception get higher linearly. On the other hand, those who do not are prone to give up avoiding risk with moderate level of impact perception.

Key Words : Prospect Theory, Risk Taking ias nder ncertainty, Risk Avoidance, Impact Perception, Disaster Risk Reduction, Disaster Management Literacy

1. はじめに

災害・防災の分野におけるリスク回避についての研究 は多岐にわたるが、大きな流れとして、リスク回避を阻害 するバイアスについての研究と、リスク回避を促す要因 についての研究の2つの方向性が存在する.

災害・防災の分野においてリスク回避を阻害するバイ アスについての研究として,正常性バイアスについての 研究(広瀬・杉森 2005)¹⁾が挙げられる.正常性バイアス とは、人間は脅威が迫っているという情報を得ていても、 その脅威が目の前に迫るまでその危険を認めないという 認知バイアスの一種である.このバイアスは災害時など にはリスク認知を遅らせ、リスク回避行動を遅らせる原 因の一つとなっている.正常性バイアスは様々な災害の 場面において応用され,説明モデルとして活用されてい る一方で、危険性を認知しているにもかかわらずリスク 回避を行わないという場面については十分に説明するこ とができない.こういった危険を認知しているにもかか わらずリスク回避を行わないといった行動については, 新たに説明モデルが必要とされている. カーネマンは人 がどのようなときにバイアスに影響されるのか,という 問題について,システム1とシステム2という概念をも ちいて説明している(Kahneman 2011=2012)²⁾.カーネマン によれば人間には、日常的に必要とされる咄嗟の判断を 司るシステム1と, 論理的思考を司るシステム2が備わ っていて,この 2 つのシステムを使い分けながら生活を 行っている.日常的に行われる咄嗟の判断を行うときシ ステム1はヒューリスティクスと呼ばれる思考の「近 道」をたよりに瞬時に判断を行う.このヒューリスティ クスは日常生活において非常に有用である一方で,バイ アスに影響されやすい. つまりバイアスに影響されずに 合理的な判断を下すためには,システム 2 を働かせる必

要があり、システム2を働かせるような要因について検 討が必要だとカーネマンは指摘する.つまりバイアスは 統制が可能であり、今後の研究としてバイアスの存在を 指摘するだけでなく、バイアスを統制できる要因を探す 研究の必要性があると考えられる.

リスク回避を促す要因についての研究については様々 な理論が存在するが,災害を含めた脅威への対処行動全 般についての主要な理論として防護動機理論(Rogers 1975, 1983)³⁾⁴⁾ が挙げられる.防護動機理論は脅威評価 (主にリスク認知)と対処評価(主にコスト認知や対処効 果性)から対処行動意図を引き起こす防護動機が形成さ れるとする理論である.この理論を枠組みとして多くの 研究が行われいるが,防災の分野においてリスク認知が 対処行動意図に及ぼす影響は弱いと指摘する研究が存在 する.尾崎・中谷内が行った研究では災害リスク認知が 非常食の備蓄行動意図及び備蓄行動を予測しないと指摘 されており(尾崎・中谷内 2015)⁵⁾,また元吉らの研究は, 家庭防災意図の規定因としてリスク認知の効果は確認さ れたもののその効果は弱いものであると報告している (元吉ら,2008)⁶.以上のような災害へのリスク認知とそ の対処行動意図との関連が必ずしも強くないという結果 は,地震への対処行動についてのレビュー論文の「多く の研究がリスク認知と地震への対処行動との関連は存在 すると指摘するが、その関連は弱いものである」という 結論(Solberg et al. 2010)⁷⁾と一致する.つまり防災の 分野においてリスク認知とリスク回避との関連は強固な ものではないと考えられている. 防護動機理論の想定す る要因以外で災害への対処行動意図を引き起こす要因と しては, 元吉らの研究では, 災害への関心の重要性を指摘 している.この研究では,災害への関心は家庭防災意図を 規定する要因としてリスク認知よりも強い効果が確認さ れたと指摘している.

以上の先行研究から、本稿ではまず、正常性バイアスで は十分に説明できないリスク追及的な行動についての説 明モデルとしてプロスペクト理論を応用することを提案 する.プロスペクト理論とはカーネマンとトヴェルスキ ーが発表した意思決定についての理論であり、「人は不 確実な損失に対してはリスク追求的になる」というバイ アスの存在を指摘した(Kahneman 2011=2012)⁸⁾.本稿で は防災の分野において、「不確実な損失に対してはリス ク追求的バイアス」の存在を確認することで、今度、防災 の分野へのプロスペクト理論の応用可能性について指摘 し、そしてその上で、リスク追及バイアスに影響を受けず にリスク回避を可能にする要因の検討を行う.

2. 研究方法

分析には、人と防災未来センターが 2015 年 11 月下旬 ~12 月上旬に兵庫県全域の満 20 歳以上の男女を対象に 行った兵庫県県民防災意識調査の結果を用いる.この調 査は質問紙調査であり,質問紙は郵送によって配布され た.調査は「今後発生が懸念される大災害に対する防災・ 減災対策をさらに進めていくに際し,現在の兵庫県民の 防災に対する意識や活動状況を把握する」ことを目的と して実施された.標本数は 2800 であり,回収数は 1103(回収率=39.4%)であった.標本抽出は住民基本台帳 に基づき層化二段無作為抽出によって行われた.調査に 用いる操作的概念及び,操作的尺度項目は仙台防災枠組 の優先行動 1 『災害リスク理解 (Understanding disaster risk)』を元に設計されている.表 1 は本研究 で使用する尺度項目とそれに対応する操作的概念を示し ている. Q1 は地震ハザードリスク認知について項目,Q2 ~Q4 は「地震によってどれほど生活に被害や影響が出 るか」という認知についての項目である.本研究では、こ れらの被害,影響についての認知を「インパクト認知」 と定義し、それぞれ「人的・物的インパクト認知(02)」 「ライフラインへのインパクト認知(Q3)」「住環境への インパクト認知(Q4)」として分析を行う.Q12 は「防災 リテラシー」についての項目である.林は防災リテラシ ーについて、「災害に対して,脅威を理解し,必要な備え などをして,いざというときに適切な行動をとっていけ る力」と定義している(林 2016)⁹⁾.本研究では Q12 を防

表.1 仙台防災枠組優先行動の優先行動1『災害 リスク理解』に基づく操作的概念と尺度項目

操作的尺度项目	回答選択肢	操作的概念	調査フレーム	仙台防災枠組み優先行動	
Q1-1多くの家が壊れるような激しい揺れがある				1	
Q1-2津波で家が流される		地震ハザードリスク認知	リスク		
Q1-3広い範囲で火災が起こる		地長ハラートリスク彩丸			
Q1-4家が傾くような液状化が起こる	TRANS CONTRACTOR				
Q2-1あなたやあなたの身近な誰か人が亡くなる	可能性が非常に高い~				
Q2-2あなたやあなたの身近な誰かが入院が必要なほどの病気怪我をする	可能性が非常に低いの4件法				
Q2-3家の財産に大きな被害がでる		人的・物的インパクト認知			
Q2-4世帯の収入が大きく減る					
Q2-5あなたの仕事・活動・家事・学業などに大きな影響がでる					
Q3-1電気が停まる			1		
Q3-3上下水道が停まる			インパクト	笑面リスク電解	
Q3-4電話やインターネットが使えなくなる					
Q3-5鉄道やバスなどの公共交通機関がとまる					
Q3-6道路が破損や渋滞で通れなくなる	とても困る~				
Q3-7ATMでお金を下ろせなくなる	全く困らないの4件法	ライフラインへのインパクト認知			
Q3-8病院・診療所で医療サービスがうけられなくなる					
Q3-9デイケアなどの福祉サービスがとまる					
Q3-10お店に食料や日用品などがなくなる					
Q3-11宅配サービスがとまる					
Q4-1家屋は大きく接換するだろう			1		
Q4-2家屋やライフラインの被害などで、遊離所で暮らすことになるだろう					
Q4-3家屋やライフラインの被害などで車やテントで暮らすことになるだろう					
04-4家屋が大きく倒壊したら、競・子ども、最せきの家に身を寄せるだろう		住環境へのインパクト認知			
Q4-5家屋が大きく損壊したら、友人・近所の家に身を寄せるだろう					
04-6家屋が大きく倒壊したらアパートなどを借りて暮らすだろう	そう思う~				
Q4-7家屋が大きく損壊したら、依設住宅にはいることになるだろう	そう思わないの4件法				
012-1地震災害や対策について強い関心・興味がある	-			1	
Q12-2地震災害や対策についての十分な知識を持っている					
012-3地震対策について、実施や身近な人と話し合っている		防災リテラシー			
Q12-4地震時のとっさのときにうまく行動できる					
Q12-5地震対策にはお金をかけている					
- 014あなたのお住まいの地域(自治体・小学校区くらいの範囲でお考えください)では、	「できている」~「できていない」		対策	1	
		地域のそなえ認知		1	
どのくらい地震などの災害が発生した際に、その備えができていると思いますか。	の 4件及び「わからない」			1	
Q11あなたは地震に備えて、日花の耐震補強 をするか伝んでいます。			1	1	
もし工事を行えば費用は250万円ですが、住宅は損傷しないで済みます。	 1. 耐酸補強をおこなう 	リスク回避prリスク論及		1	
行わなかった場合に地震が起こると、50%の確率で住宅は損傷し、修繕に500万円かかりま	0. 耐酸補強をおこなわない			1	
す。 027原神淡路大震災で、身内が亡くなる、もしくは家が大きな損害を受けた	1.あてはまる 2.あてはまらない	装害の経験	世界の経験		
QCI設作式始入炭火で、房内ロビレトなり、もしくは家が大きな狼害を受けた	エのてはまり とのてはまわない	火音の駐駅	火きの結核		

災リテラシーの操作的尺度として分析を行う.Q11「あな たは地震に備えて,自宅の耐震補強をするか悩んでいま す.もし工事を行えば費用は250万円ですが,住宅は損傷 しないで済みます.行わなかった場合に地震が起こる と,50%の確率で住宅は損傷し,修繕に500万円かかりま す.あなたならどうしますか.」は分析の中心となる項目 である.この項目はプロスペクト理論を元に作られた項 目であり,「耐震補強を行う」を選べばリスク回避的, 「耐震補強を行わない」を選べばリスク追求的として分 析を行う.

3. 結果

(1) 質問項目の変数化

分析にあたって、地震ハザードリスク認知,人的・物 的インパクト認知、ライフラインへのインパクト認知,住 環境へのインパクト認知について回答者ごとに主成分得 点もしくは因子得点を求め尺度化を行った.地震ハザー ドリスク認知,人的・物的インパクト認知,ライフライン へのインパクト認知は第1主成分得点を各項目の尺度と した.住環境へのインパクト認知は2因子構造が確認さ れた.そこで第1主成分に因子負荷量が高かったのは Q4-1,Q4-2,Q4-3,Q4-7であったため「住宅被害による発 災直後の避難可能性認知」と名づけた.第2主成分に因 子負荷量が高かったのはQ4-4,Q4-5,Q4-6であり「住宅 被害による発災100時間後の仮住まい認知」と名づけ た.Q12の防災リテラシーについては主成分得点をもと め,得点が正の値である場合1,負の値である場合は0と した「防災リテラシー高ダミー」を作成した.

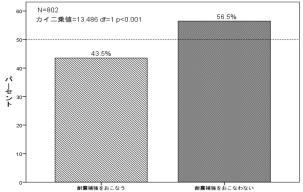


図 1. 耐震補強を行う(費用は 250 万円,住宅は損壊し ない),耐震補強を行わない(50%の確率で自宅は損壊 し修繕費用が 500 万かかる)の回答の度数分布図

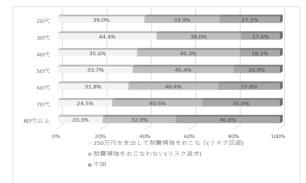


図 2. 耐震補強を行う(費用は 250 万円,住宅は損壊 ない),耐震補強を行わない(50%の確率で自宅は 損壊し修繕費用が 500 万かかる)と年齢とのクロス

(2) 不確実な損失に対するリスク回避バイアスの影響を 受けずにリスク回避を促す要因

まず防災の領域において不確実な損失に対するリスク 追及バイアスが存在することを確認する.図1はQ11へ の回答の度数分布図である.「耐震補強を行わない」と 回答する人が有意に多いこと(p<.001)が確認できる.し たがって、Q11 において、不確実な損失に対するリスク追 及バイアスが存在すると考えられる. 続いて図 2 は年齢 と Q11 の無回答も含めた回答との関連を示した図であ る.30代においてもっともリスク回避的であり,そこか ら年齢が上がるにつれてリスク回避の回答が減少してい くことが確認できる.この傾向は家族構成などと関連し ている可能性が考えられる. リスク回避でもなくリスク 追及でものない無回答に着目すると,無回答の割合はさ きほどのリスク回避と反対に、30代で最も無回答が少な く,高齢になるほど無回答が増えていき,80 代以上では 約半数が Q11 に対して無回答であった.防災・災害の場 面において、リスク回避かリスク追及かを選択できない ことが生死に関わる可能性があることを考えると、とっ さの判断ができないというこの無回答層もリスク追求を 選択する人と同程度に危険であると考えられる.したが って続く分析では「耐震補強を行わない」と「不明」を 統合し値を0とし、「耐震補強を行う」を1とした「リ スク回避ダミー」を従属変数として分析を行う.

図3はリスク回避ダミーを従属変数とした回帰プロッ ト図である.横軸は人的・物的インパクト認知であり、 「阪神淡路大震災で身内が亡くなる、もしくは家が大き な被害を受けた人」(以後、「阪神淡路で大きな被害を受 けた人」と表記)を点線で表記し、あてはまはらない人を 鎖線で示している.その結果阪神淡路大震災で大きな被 害を受けた経験がある人はインパクト認知の高まりに対 してリニアにリスク回避を選択する一方で、結果阪神淡 路大震災で大きな被害を受けた経験してない人は中程度 以上のインパクト認知に対してリスク回避をあきらめる ことが読み取れる.このあきらめの存在は興味深い点で はあるが,災害の経験は操作することができないため,こ の知見は防災教育等に応用することができない.そこで ロジスティック回帰分析を行い,リスク回避を選択させ る要因の検討とともに,災害の経験以外でインパクト認 知との交互作用の検討を行った.

モデル I では, 年齢を投入している. 30 代ダミーに有 意にリスク回避促す効果が確認できる(p<0.1). このこと は図 2 の結果とも整合している. モデル II ではリスク認 知, インパクト認知, 防災リテラシー高ダミー, 地域のそ なえ認知, 防災訓練への参加を投入している. 地震ハザー ドリスク認知は有意な影響が認められないが, 人的・物 的インパクト認知は 10%水準ではあるが有意にリスク回 避を促す要因となっている. また防災リテラシー高ダミ

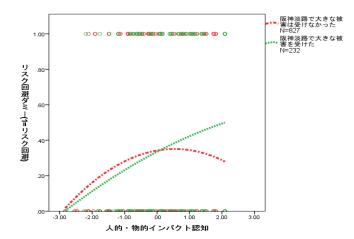


図 3. リスク回避ダミーを従属変数とした人的・物的インパクト 認知と阪神淡路での大きな被害の経験との関連

モデルⅢ

モデルⅡ

	_				-					
		В	Exp(B)	標準誤差	В	Exp(B)	標準誤差	В	Exp(B)	標準誤差
年齢	年代ダミー:基準変数(0=80代ダミー)									
	20代ダミー	. 568	1.765	. 446	. 632	1.882	. 469	. 663	1.941	. 470
	30代ダミー	. 728 *	2.071	. 409	. 678	1.969	. 431	. 665	1.945	. 431
	40代ダミー	. 433	1. 542	. 385	. 382	1.465	. 402	. 358	1.430	. 402
	50代ダミー	. 351	1.420	. 393	. 316	1.372	. 409	. 289	1.334	. 410
	60代ダミー	. 310	1.364	. 382	. 225	1.253	. 393	. 185	1.204	. 394
	70代ダミー	073	. 929	. 392	117	. 890	. 402	136	. 873	. 402
リスク										
	地震ハザードリスク認知				. 095	1.100	. 085	. 090	1.094	. 086
インパクト										
	人的・物的インパクト認知				. 187 *	1.205	. 095	. 252 **	1. 287	. 103
	ライフラインへのインパクト認知				. 072	1.074	. 085	. 052	1.053	. 087
	住居の被害による発災直後の避難可能性認知				197 **	. 821	. 094	207 **	. 813	. 095
	住居の被害による発災後100時間後の仮住まい認知				175 *	. 839	. 101	183 *	. 833	. 102
対策										
	防災リテラシー高ダミー				. 634 ***	1.885	. 156	. 467 **	1.595	. 189
	地域のそなえ認知:基準変数 (0=地域の備えについて:できていないと思う)				*			*		
	地域のそなえ認知:できていると思うダミー				. 887 **	2.427	. 398	. 920 **	2.510	. 401
	地域のそなえ認知:どちらかといえばできていると				. 630 **	1.878	. 256	. 630 **	1.877	. 257
	思うダミー 地域のそなえ∶どちらかといえばできていないと思				. 597 **	1.817	. 243	. 597 **	1.816	. 243
	うダミー									
	地域のそなえこわからない				. 498 *	1.645	. 273	. 508 *	1.662	. 274
	防災訓練への参加:基準変数 (0=今後も参加する気はない)									
	防災訓練への参加:最近1年に参加したダミー				. 287	1.332	. 264	. 292	1.339	. 265
	防災訓練への参加:訓練に参加はしていないが、 機会があれば参加したいダミー				. 388 *	1.474	. 221	. 372 *	1.451	. 222
交互作用項	人的・物的被害理解の2乗							251 **	. 778	. 104
	人的・物的インパクトの2乗*防災リテラシー高ダ ミー							. 213 *	1. 238	. 127
	<u>ミー</u> 定数	−1. 003 ⊧∗	. 367	. 352	-2.151 ***	. 116	. 453	-1.922 ***	. 146	. 460
	Nagelkerke R2 乗		. 018			. 087			. 096	
	N=909									
	注)***:p<0.01 **:p<0.05 *:p<0.1									

表 2. リスク回避ダミーを従属変数としたロジスティック回帰分析

モデルI

ーがリスク回避に対して正の効果を持っていることが認められた(p<0.01).さらに地域のそなえ認知がリスク回避を促す影響を持っていることも確認された(p<0.05). モデルIIIでは,人的・物的インパクト認知の2乗と防災リテラシー高ダミーの交互作用を投入した.その結果,10%水準で有意な効果が確認された.図4はリスク回避ダミーを従属変数とした回帰プロット図であり,横軸は人的・物的インパクト認知である.防災リテラシーが高い人は点線で表し,低い人は鎖線で示している.防災リテラシーが高い人はインパクト認知の高まりに対してリニアにリスク回避を選択する一方で,防災リテラシーが低い人は中程度以上の人的・物的インパクト認知に対してリスク回避をあきらめる傾向があることが認められた.

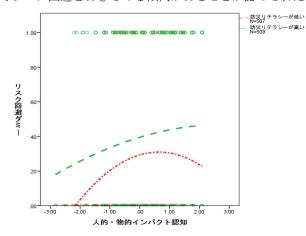


図 4. リスク回避ダミーを従属変数とした人的・物的 インパクト認知と防災リテラシーとの関連

4. 考察と結論

前章での分析結果をもとに本研究であきらかとなった ことについて考察を行い,結論を述べる.まず図2に示し た「耐震補強を行う(費用は 250 万円,住宅は損壊しな い), 耐震補強を行わない(50%の確率で自宅は損壊し修繕 費用が 500 万かかる)」の度数分布図においてリスク追 求的な回答が有意に多いことが確認された.このことは 防災の分野において,不確実な損失に対するリスク追求 バイアスが存在することを示すものであり,防災の分野 へのプロスペクト理論の応用可能性を示している. 続い てリスク回避ダミーを従属変数としたロジスティック回 帰分析の結果, 地震ハザードリスク認知はリスク回避に 有意な影響は確認されなかった.一方で,人的・物的イン パクト認知はリスク回避を促進する傾向が確認された (p<0.1). さらに人的・物的インパクト認知はリスク回避 ダミーを対して非線形的な影響を与えていることが確認 された. すなわち防災リテラシーが高い人はインパクト 認知の高まりに対してリニアにリスク回避を選択する一 方で,防災リテラシーが低い人は中程度以上の人的・物 的インパクト認知に対してリスク回避をあきらめる傾向 があることが確認された.このことは今後,防災教育にお いて,不用意に災害の脅威の大きさを強調することの危 険性を指摘するものである. さらにモデルⅡにおいて防 災リテラシー高ダミーがリスク回避を促す要因となって いることからも、今後の防災教育において、防災リテラシ ーを高めることが重要だと言えるだろ.また本研究では 中心的なトピックとしては扱わなかったが,自分の住ん

でいる地域は災害へのそなえができていると思っている 人ほど、リスク回避を選択する傾向があった.この結果は 防災行動の規定因として周囲の規範の影響(尾崎・中谷 内 2015)⁵⁰を社会調査においても確認できた例といえる だろう.最後に今後の課題について指摘する.本研究では プロスペクト理論に基づく質問項目として耐震補強を取 り上げ、分析を行ったが、その他の防災行動についてもリ スク追求バイアスが確かに働くのか、ということについ ては検討が必要である.また本研究では、リスク追求バイ アスに影響を受けた結果としてリスク追求を選択したの か、合理的な判断に基づきリスク追求をしたのか、という ことについては分別ができなかった.この点についても 今後の検討課題となる.

謝辞

本研究で用いた,地震ハザードリスク認知(Q1),人的・ 物的インパクト認知(Q2),ライフラインへのインパクト 認知(Q3)住環境へのインパクト認知(Q4),防災リテラシ ー(Q5)防災リテラシー(Q12)」「地域のそなえ認知(Q14), 災害の経験(Q27)の概念化及び操作的尺度項目の作成は, 人と防災未来センター宇田川真之研究主幹によるもので ある.ここに記して感謝申し上げます.

本研究は文部科学省科学研究費助成事業(基盤研究 (S)「減災の決め手となる行動防災学の構築」(研究代表 者:林春男)の研究成果である.

参考文献

- 1) 広瀬弘忠・杉森伸吉,2005,「正常性バイアスの実験的検 討」『東京女子大学心理学紀要』創刊号:81-86.
- Kahneman, D., 2011, *Thinking, Fast and Slow,* Brockman. (=2012, 村井章子訳『ファスト&スロー―あなたの意思はどのように決まるか?上』早川書房.)
- Rogers, R. W., 1975, "A Protection Motivation Theory of Fear Appeals and Attitude Change," *The Journal of Psychology*, 91: 93-114.
- 4) Rogers, R. W. ,1983, "Cognitive and Psychological Processes in Fear Appeals And Attitude Change: A Revised Theory of Protection Motivation," J, T, Cacioppo and R, E, Petty eds., Social Psychophysiology: A Sourcebook, New York: Guilford Press, 153-176
- 尾崎拓・中谷内一也,2015,「記述的規範と他者との相互 作用が地震防災行動に及ぼす影響」『社会心理学研究』 30(3):175-182.
- 6) 元吉忠寛・高尾堅司・池田三郎,2008,「家庭防災と地域 防災の行動意図の規定因に関する研究」『社会心理学研 究』23(3): 209-220.
- 7) Solberg, C., Rossotto, T. and Joffe, H., 2010, "The Social Psychology of Seismic Hazard Adjustment: Re-evaluating The International Literature," Natural Hazard and Earth System Sciences, 10: 1663-1677.
- Kahneman, D., 2011, *Thinking, Fast and Slow,* Brockman. (=2012,村井章子訳『ファスト&スロー―あなたの意思はどのように決まるか?下』早川書房.)
- 9) 林春男,2016,太田敏一・松野泉『防災リテラシー』(i), 森北出版